

主な展示資料

資料名	年代	所蔵者
清河八郎遺像(中村紫明筆)	1916(大正5)	清河八郎記念館
雷山俳句(額)		清河八郎記念館
雷山使用の手文庫		清河八郎記念館
「楽水楼」額(東条一堂書)		清河八郎記念館
八郎元服時授けられた太刀		清河八郎記念館
公私用留帳	1849(嘉永2)	歎喜寺
公私用留帳	1865(元治2)	歎喜寺
北辰一刀流兵法免許	1860(万延1)	清河八郎記念館
八郎愛用の硯「楽水遺硯」		清河八郎記念館
八郎愛用の印章		清河八郎記念館
霞ヶ関一條	1860(万延1)	清河八郎記念館
志士寄書屏風	1862(文久2)	清河八郎記念館
八郎着用の紋服		清河八郎記念館
八郎遺刀		清河八郎記念館
八郎筆写「北辺地図」	1853(嘉永6)	清河八郎記念館
八郎筆写「秋汎上書」	1855(安政2)	清河八郎記念館
書法十二詩屏風		清河八郎記念館
八郎書簡(お蓮あて)	1856(安政3)	伊藤光哉氏
八郎書簡(嘉永7.11.8・14・24付)	1854(嘉永7)	清河八郎記念館
八郎書簡(安政1.12.8付)	1854(安政1)	清河八郎記念館
八郎書簡(安政2.10.28付)	1855(安政2)	清河八郎記念館
八郎書簡(文久3.4.12付)	1863(文久3)	清河八郎記念館
お蓮書簡(八郎あて)		鶴岡市立郷土資料館
お蓮書簡(水野あて)	1862(文久2)	清河八郎記念館
八郎懐中旗		清河八郎記念館
母と妻作成の懐囊		清河八郎記念館
※旦起私乗	1849(嘉永2)	清河八郎記念館
※私乗後篇	1852(嘉永5)	清河八郎記念館
※清河楽水楼記文三章	1849(嘉永2)	清河八郎記念館

資料名	年代	所蔵者
※潜中紀略	1862(文久2)	清河八郎記念館
※潜中紀事	1862(文久2)	清河八郎記念館
※潜中始末	1862(文久2)	清河八郎記念館
※西遊紀事	1850(嘉永3)	清河八郎記念館
※芻蕘論語篇	1859(安政6)	清河八郎記念館
※芻蕘論文道篇	1859(安政6)	清河八郎記念館
※芻蕘論武道篇	1859(安政6)	清河八郎記念館
※西遊草	1855(安政2)	清河八郎記念館
※漢詩「既作回天勢」(堅幅)	1861(文久1)	清河八郎記念館
※回天封事	1862(文久2)	清河八郎記念館
上書	1863(文久3)	清河八郎記念館
※清河八郎像(藤本鉄石筆)	1862(文久2)	清河八郎記念館
※回天遺事	1861(文久1)	清河八郎記念館
八郎辞世(掛幅)	1863(文久3)	清河八郎記念館
浪士廻廻状留	1863(文久3)	清河八郎記念館
温海組大庄屋御用留抄	1864(元治1)	鶴岡市立郷土資料館
聞書雑書	1863(文久3)	鶴岡市立郷土資料館
大府輯録	1863(文久3)	鶴岡市立郷土資料館
鯨絵(両四時角力取組)	1855(安政2)	町田市立博物館
鯨絵(鯨絵筆を震)	1855(安政2)	町田市立博物館
鯨絵(鯨のけんくわ)	1855(安政2)	町田市立博物館
鯨絵(鯨が金をばらまく他)	1855(安政2)	町田市立博物館
鯨絵(世は安政民之賑)	1855(安政2)	町田市立博物館
道化狂画		町田市立博物館
善悪競		町田市立博物館
太平優美論		町田市立博物館
善悪混雑嘶		町田市立博物館
撃剣英名録	1859(安政6)	清河八郎記念館
清河八郎国事奔走の図		清河八郎記念館

※は山形県指定文化財

企画展

山形の志士 清河八郎

1992年7月11日(土)～8月30日(日)
山形県立博物館
〒990 山形市霞城町1-8 TEL(0236)45-1111代



清河八郎遺像
(中村紫明筆・1916)

開催にあたって

出羽庄内から大志を抱いて江戸に上り、文武両道の士として頭角をあらわし、江戸市中にその名を知られた清河八郎。しかし「内憂外患」の時代が八郎を次第に攘夷倒幕の志士として風雲急を告げる政治のつばへひきこんでいく。

清河八郎は東北出身の数少ない草莽の志士の一人であり、文武に非凡な才を持ちながら維新の夜明けを見ずに斃れた志士の一人であります。郷土の偉才が何を考え、どう行動したのか、130年前のその時代に思いを馳せることも今日ならではの意義あることと考えます。

本展を開催するにあたり、貴重な資料を快く出品いただくとともに、展示にあたってご助言を賜りました関係機関、各位に厚くお礼申し上げます。

館長 古沢平太郎

展示解説

ふるさと清川と立志の日々

清河八郎は1830(天保1)年10月10日、出羽庄内清川村(山形県東田川郡立川町清川)に生まれた。幼名斎藤元司。清川は最上川沿いの宿駅で庄内藩も関所を置いた水陸交通の要路であり、山紫水明の地でもあった。八郎の生家斎藤治兵衛家は代々酒造業を営み、大庄屋格、十一人扶持、郡支配となった郷土の家柄である。また祖父も父も文雅の道を好み、邸内に「楽水楼」と名づけた書齋を建て多くの文人墨客を迎えたという。このような環境の中で八郎は7歳で父から学問の手ほどきを受け、鶴岡の清水郡司、伊達鶴三、関所役人畑田安右衛門らに学んだ。15歳の日記『亘起私乗』に「始めて憤を発す。自ら思ふ。人生豈碌々として市塵に滅びんや。時至らば即ち笈を東都に負いて大名を天下に轟かさん」と大いなる志と江戸遊学の願いを記していた。

文武修行

八郎は1847(弘化4)年、18歳で江戸に出て古学の東条一堂に入門し、「一堂門三傑の一人」と称されるほどになる。のちには安積良斎、幕府の昌平黉に学び、一時は京都の違古堂でも学んだ。また書道は生方鼎齋、剣術は千葉周作に入門し稽古に励んだ。剣術は8年で免許皆伝の腕となった。

25歳で初めて清河八郎と名のり塾を開くが、30歳で「経学・文章・書・剣術指南」の看板を掲げて神田お玉ヶ池に塾を持った。一人で学問と剣術を教える塾は広い江戸市中でも清河塾だけであったという。この間八郎は儒学者として『芻蕘論語篇』を初め多くの著作を残している。また一方で、関西旅行、九州旅行、蝦夷地視察、常総旅行、母を連れての関西旅行等、大いに旅を楽しみ見聞をひろげた。それらが『西遊紀事』『西遊草』等にまとめられた。

国事奔走

虎尾の会 1860(万延1)年3月3日、桜田門外の変がおこり政情騒然たる中で八郎はこれまで修得した天下国家を経

理する学問を活用して国政を改革しようと考えた。国の前途を憂い、尊王攘夷を唱える者が清河塾に集まり、虎尾の会が結成された。

潜行の旅 虎尾の会の活動はやがて幕府の知るところとなり、1861(文久1)年5月20日、幕府のしかけた罠にはまり八郎は人を斬ってしまう。八郎を含め4人は江戸を脱出するが、同志や妻、弟ら8人は小伝馬町の牢に繋れてしまった。八郎らの潜行の旅は、全国を遊説し、攘夷倒幕の同志を求め旅でもあった。九州遊説では平野国臣、真木保臣、小河一敏、松村大成らと会い大いに意気があがった。そして攘夷の志士らに信望の篤い青蓮院宮の令旨をいただいたと偽って京都に尊王倒幕の兵を挙げることを策したが、「寺田屋の変」で挫折してしまう。



毒母旅行を綴った「西遊草」8冊

浪士組 「寺田屋の変」で関西に拠点を失なった八郎は江戸にむかう。獄中の同志や妻や弟を救うためにも急がねばならない。八郎は政事総裁松平春嶽に献策する。その内容は攘夷、政治犯の釈放、浪士(浪人)の人材登用である。当時浪士対策に苦慮していた幕府は八郎の献策を受け入れ浪士組をつくる。その募集や編成には八郎の力が大きく関わった。幕府は將軍家茂の上洛護衛という名目で浪士組を京都に派遣する。このことから清河八郎を変節の士とする誤解が生じたが、それは誤りであって、孝明天皇への『回天封事』や浪士組の名で学習院へ上書し、直接攘夷の勅書を得たことは、実に攘夷倒幕をすすめる「奇策」であったのである。

このあと浪士組は江戸へもどるが、近藤勇や芹沢鴨ら京都に残った浪士たちで、「新選組」が結成される。

八郎の遭難 江戸にもどった浪士組をあくまでも攘夷の実行に動かそうと八郎は暗躍するが、幕府と「偽浪士問題」で決定的に対立してしまう。1863(文久3)年4月13日、八郎は友人の上山藩儒者金子与三郎に招かれ酒食のもてなしを受け

ての帰途、麻布一ノ橋付近で幕府の刺客のために暗殺された。時に34歳。

旅と清河八郎

6歳のとき祖父と田に連れられ「狛倉神」の若木神社(山形県東根市)や山寺(山形市)等を旅して以来、八郎の旅は蝦夷地から九州にまで及んでおり驚くべきものがある。特にふるさとの田を連れて伊勢詣をし、そのあとは気のむくまま旅を楽しんでの6ヶ月間1日も欠かさず記した『西遊草』8冊からは八郎の細やかな情愛を読みとることができる。

ジャーナリストの眼

豪気果敢な人物として知られる清河八郎であるが、他面細やかな情愛と几帳面な性格の持ち主でもある。これらは多くの著作や日記でもわかるが、八郎は遊学中の江戸から、旅先の地から実に多くの手紙を家族や知人らに当てている。その中から「地震」についての報告を記した手紙を展示した。見聞した情報を冷静に記しているが、まさに今日のジャーナリストの眼を感じさせるものがある。

八郎の妻 お蓮

八郎が遊里つとめをしていたお蓮と、親の反対をおしきつて結婚したのは1856(安政3)年のことである。お蓮は出羽田川郡熊出村(山形県東田川郡朝日村)の医師快庵の四女である。生家が貧しく養女に出され、人生の辛酸をなめた。八郎はお蓮の人格の高潔さに惹かれたという。八郎潜行中小伝馬町牢に捕われの身となるが1年3ヶ月の間、拷問にあつても毅然たる態度を貫いたという。1863(文久3)年8月7日、庄内藩邸揚り屋で牢死。毒殺ともいわれる。

展示協力者(順不同・敬称略)

清河八郎記念館、清川公民館、鶴岡市立郷土資料館、町田市立博物館、立川町社会教育課、歓喜寺(立川町)、小山松勝一郎(酒田市)、今野与喜雄(朝日村)、伊藤光哉(鶴岡市)